

大森拓哉：「騙されないための客観的事実に基づく思考法」

オムニバスによる問題解決学総論の B クラスの第 3 回目として大森教授が登壇。第 3 回目は、「あなたは正しいと信じていることは本当に正しいですか」といった質問から話が始まる。以下、講義のポイントをまとめてみよう。

「あなたが正しいと信じていることは本当に正しいですか？」

「テレビで言ったことは正しいですか？」

「大学の先生が言ってることは正しいですか？」

「その人とこの人、言っていることが違うけど、どっちを信じれば良いの？」

こういう場合、人によって、正しいかどうかを判断する方法は様々だ。たとえば、「自分が正しいものを信じる」という人もいるし、「みんながそう言っているからたぶん正しいと考える（自分の考えはないのか）」という人もいる。でも、それでは、客観的に判断しているとはいえない。誰もが正しいと考えられる判断はどういうものだろうか。

あるお正月の新聞記事。三が日が終わり、お賽銭を数えるシーンの報道。同じシーンをまとめている記事なのに、異なる新聞ではかなり印象が異なる記事が掲載された。A 紙は高額紙幣が少なく景気が悪いという記事。もう一つは、高額紙幣も見られ景気回復に期待という記事。同じことでも印象が異なる。つまり、見るものと同じでも客観的とは限らないという話。

つづいて血液型占いや星座占いなどの例を元に、さらに、世の中に広まっている常識と思われているものが、必ずしも正解というわけではないという話も説明される。

実際に、昨日の星占いで良いと言われていた人が本当に良い日だったかを聞くなど、その場で調査。加えて、TV での星占いが局によって明らかに違うことなどを示しながら、学生が「なるほど」と思える事例で、信じているものが必ずしも正しいとは限らないという話が展開された。

これらの話を受けて、なぜ人は事実ではないものも信じてしまうのかを解説がすすむ。例えば、「人は権威のあるものにしがたやすい」、「誰にでもあてはまること書いてあると自分にもあてはまると思ってしまう（フリーサイズ効果、バーナム効果）」など、いろいろな要因があることが指摘され、専門の心理学の話についても話が進んでいく。心理学の様々な専門用語が解説されるが、一つ一つが事例で説明されていくので、非常にわかりやすい。心理学をもっと勉強したいという雰囲気が広がっていく。

さらにここまでの話を受けて、ものの判断に「客観的な情報」が必要となるという話に進む。

まず、客観的な情報として「データ」を用いて判断する例として、クラスでの血液型と性格についてのデータを分析した結果を見せる。でも、それだけでは「正しい」判断とはいえない事例を紹介。たとえば、血液型ごとに何人が神経質かという度数のデータでは良くないと指摘。というのは、そもそも何型が何人いてその中で何人が神経質かといった割合に直さなければ、判断できないといった具合だ。

血液型の例だけでなく、「一見正しい」と思えるデータでも、ちゃんと考えないと騙されるという事例をどんどん紹介される。おもしろい。

・まとめ

今回のお話は、一見、真実と思われる話がもしかしたら真実とは限らないこと。それに関わらず、人はそういうものに騙されやすい傾向があること。だからこそ、客観的事実に基づく思考法（データリテラシー：データに基づいて物事を判断する力）を身につけておかなければならないということが、様々な事例と共に解説されました。